新批評・近代日本文学の構造

6

近代戦争文学

安田　武・有山大五編

国書刊行会

新批評・近代日本文学の構造 6 近代戦争文学

昭和55年8月10日　第一刷発行
平成4年1月20日　第二刷発行

著作権者との
申合せにより
検印省略

編者　安田　武
　　有山大五
発行者　割田剛雄

〒170　東京都豊島区巣鴨3－5－18
発行所　株式会社 国書刊行会
電話 (3917)8287(代表)振替・東京5-65209

落丁本・乱丁本はお取替いたします。　印刷・セイユウ写真印刷㈱　製本・青木製本
ISBN4-336-02043-4

Ⅵ 近代戦争文学 目次

第一章　近代戦争文学の意義

戦争文学研究の意義……安田　武　7
作者の戦争体験と文学……有山大五　13

第二章　戦争文学成立の基盤

戦いの推移と軍隊の構造……森安理文　49
戦場の風土……大森盛和　67
銃後……馬渡憲三郎　87

第三章　戦争文学の諸相

ルポルタージュと小説……永野　悟　109
児童文学……栗原直子　119
軍歌と軍国歌謡……山中　恒　131
詩歌……ワシオ・トシヒコ　141
外国の戦争文学との比較……千葉宣一　155

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

戦争文学と非体験者の位置……星野光徳 171
教材としての戦争文学……鈴木国郭 191

第四章　戦争文学作家論

岩田豊雄と火野葦平……田中艸太郎 213
日比野士朗と上田廣……森　磐根 223
井伏鱒二と大岡昇平……池田純溢 233
高木俊朗と吉田満……森川達也 245
島尾敏雄と阿川弘之……本田典國 255
原民喜と峠三吉……城田慈子 265
武田泰淳と伊藤桂一……竹内清己 277
林芙美子と大田洋子……富永秀子 291
尾崎士郎と中山義秀……伴　悦 303
野間宏と大西巨人……松本鶴雄 315

資料　戦争文学年表……戦争文学研究会編　327
あとがき……有山大五　375

第一章　近代戦争文学の意義

戦争文学研究の意義

安田武

戦争文学「研究」の意義を、こと更めて問われれば、私の答は否定的たらざるをえない。しかしながら、それは、ひとり「戦争」文学のみにとどまらぬだろう。総じて「文学」研究一般について、同じことがいえるのであって、あまりにも有名すぎる挿話だが、文学は男子一生の事業に非ずとし、自らの筆名を二葉亭四迷（くたばってしめえ）と号した長谷川二葉亭の自嘲と逆説を、私も共有しないわけではないからだ。

いったい、思想の有効性とか、生産性とかいった言葉が、いや、言葉ではなくて、そういう言葉に付託された「思想」が、いつの頃から人々の口の端にのぼるようになったのか、どんな時代背景、どんな思想風潮のなかから産まれてきたものか私は知らない。不思議な言い草ではある。もし、思想に有効性あるいは生産性がなければ、思想をやめるとでもいうのだろうか。有効であってもなくても、生産性があろうがなかろうが、思想は思想であることを、やめはしないだろう。よしんば、思想が人の身を喰い滅ぼすとしても、やはり思想である。思想とは、そういうものだ。思想を内包するものとしての文芸もまた、いうまでもなく、同様であろう。二葉亭四迷の逆説は、この背理のシニカルな表白でしかない。

戦争文学の存在とその「研究」が、文学研究の一課題として、または、思想一般の問題として意味があろうがなかろうが、有効であろうがなかろうが、少なくとも私にとって問うところではない。

昭和十年代のしょっぱなに中学生となった私は、その頃、既に、いわゆる一個の文学少年であったから、そして、昭和十年代の終りに、軍隊・戦場へ引き出された私には、いうなれば、文学と戦争とが、わが身の十代後半、二十代前半の中で、正面衝突を遂げてしまったようなものであったから、文学と戦争ないし戦争文学を問うことは、私の思想の初心を問い返すことに他ならなかった。そこから思想がはじまり、そこ以外に思想をはじめるところはない、といっていい。

さて、戦争文学とは何か、何を指して——どのような文学、作品を指して、戦争文学とするのか、という問題があるであろう。

本巻においても、各項の執筆者が、それぞれの見解を、それぞれに述べている。私自身は、この場合にも、戦争文学とは何かを、概念ふうに定義づけるより前に、冒頭に記したとおり、おのれ一個の身に即して、まず考えてみたい。

普通に「戦争文学」という場合、誰の心にも浮んでくるのは、「戦場」の文学——といっていいものだろう。それがフィクションであれ、ノンフィクションであれ、戦場を舞台背景とし、そこに登場する将兵あるいは非戦闘員を人物とした戦場の記録が、イの一番に考えられる。むしろ、戦争文学とは、端的には、戦場と将兵を描いたこの種の作品と、一般には理解されている。

いうまでもないことだが、戦場は、一瞬にして、将兵の生命を奪いとる文字通りの極限状況であった。生死を賭した限界状況での体験は、それ自体として、文学の得がたい素材であるだろう。だが、ここでも私の体験に即した上での一つの結論だが、「戦争」が、そこに生きることを余儀なくされた者にとっての苦痛であるのは、ただ戦場での戦闘行為の激烈さや、容赦ない酷薄性だけにあるのではなかった。

一例を挙げれば、読者は、直ちに気づかれようが、野間宏の『真空地帯』は、軍隊と兵営と兵士の日常を克明に描

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

いたが、戦場も戦闘も描かれてはいない。にもかかわらず、戦後に書かれた戦争文学の、最上級の傑作であることは、縷言を要すまい。誤解をおそれずにいえば、旧帝国軍隊では、野戦に在る方が、却って、兵営内の内務班より、まだ救いがあったとさえいえなくはないのだ。兵営は、人間関係における非人間的極限状況とでも、いってよいものだったからである。『真空地帯』が戦争文学として傑作の一つであるのは、まさにそうした極限状況の息づまるような非人間性を、剰すところなく捉え描いているからであろう。戦闘の有無にかかわらず、軍隊の体験そのものが、そのまま戦争文学の素材であったわけである。

戦場に前線と後方があり、戦時態勢の国全体は、戦場に対して銃後と呼ばれた。軍隊が兵営の内部から、一般社会を、「地方」あるいは「娑婆」とよんでいた、その地方ないし娑婆自体が、戦争の進行拡大過程で、兵営化していったように、銃後もまた戦場化していく。とりわけ本土空襲が日常化し、米空軍の無差別爆撃が、非戦闘員の上にも、容赦なく襲いかかってきた時、もはやどこにも銃後という場所は存在しえなかった。上陸作戦が敢行された沖縄は、むろん戦場そのものであり、原子爆弾の投下された広島・長崎は、最も悽惨な戦場といわねばなるまい。井伏鱒二『黒い雨』は、その最も悽惨な戦場のありのままを写して、不滅の戦争文学といえよう。

だが、前戦と銃後とか、軍隊と地方とかいった区別とは別に、戦争が行われている時代の、まさに時代環境というものがあるであろう。もう一度、私自身の体験にたち戻っていえば、昭和六年、いわゆる満州事変（柳条溝事件）が勃発した時、私は小学校三年生、昭和十二年、いわゆる支那事変（蘆溝橋事件）が勃発した時は中学二年生、大東亜戦争が勃発した昭和十六年、文化学院を中退した私は、翌春の大学受験について気重な心で思い悩んでいた。

二つの中学で、退学を余儀なくされた経緯に関しては、ここに詳細を書いても仕方がないし、また書く元気もないけれど、要するに一言でいいきってしまえば、国を挙げての軍国主義化の風潮の中で、教育の場もまた例外ではなかった、どころか、むしろその尖兵であったことにつきるといっていい。たかが中学生の私に、むろん思想らしい思想

などといったもののあろう筈もなく、たかだか、たとえば芥川龍之介の『侏儒の言葉』の一節に、少年らしい熱烈な共感の拍手を送っていたにすぎない。

軍人は小児に近いものである。英雄らしい身振を喜んだり、所謂光栄を好んだりするのは今更此処に云ふ必要はない。機械的訓練を貴んだり、動物的勇気を重んじたりするのも小学校にのみ見得る現象である。殺戮を何とも思はぬなどは一層小児と選ぶところはない。殊に小児と似てゐるのは喇叭や軍歌に鼓舞されれば、何の為に戦ふかも問はず、欣然と敵に当ることである。

学校内での軍事教育が、日増しに厳しくなり、配属将校の発言力が有無をいわさぬ圧力を持ちはじめた頃、芥川の文学は反軍的であり、芥川を尊敬する中学生は、危険思想家の卵であった。それだけで、十分「退学」に値した。それでなくてさえ、非常時局に、文弱の徒輩は、ゆるすべからざる非国民なのだった。自由主義といい、人格・教養主義といい、いまから思えば、当然やわな幼ないものであった。それでも、狂信的な愛国思想からの「迫害」を、陰に陽に免がれなかったのである。

「黒襟の服をつけた警防団員の役人風はつのるばかりである、日々の暮らしは警察や警防団や町会や隣組でがんじがらめにされている」(富士正晴『帝国軍隊に於ける学習・序』)、呼吸のつまるような時代環境――『銃後の守り』という言葉が使われ、慰問文・慰問袋がはやった。新聞は戦争記事で埋った。戦争は次第に日常化し、国民生活を外からも内からも変えていった。宮城や明治神宮の前では、電車の中にいる乗客が脱帽を強制と感じる社会的圧迫が起るようになった。ハデな服装をしていると、非国民といって非難された。(中略)戦局が進むにつれて、国民生活の画一化、非人間化は、内臓を泥足でかき回わすほどの狂暴なものになっていった」(『プロレタリア文学大系』三一書房8 解説・竹内好)時代環境というものがあったのだ。

軍隊も戦場も、むろん私の戦争体験として、暗く重いものに相違なかったけれども、しかしまた、いっそう暗く重い戦争体験は、昭和十年代という「一時代環境」を掩った重苦しさの裡にあったと思う。当然、私にとって、戦争文学とは、単に戦場や軍隊を描いた作品、「銃後」を描いた作品にとどまらず、そうした時代のすべてを包んだ「環境」全体のこととなる。ならざるをえない。

ここでいま、外国の作品に例をとらねばならぬのは、いかにも口惜しいことだけれども、ハンス・ペーター・リヒター『あの頃はフリードリヒがいた』(上田真而子訳・岩波少年文庫)という標題の本を、紹介しておきたい。

この余り長くない少年少女向けの物語には、戦争という狂気の事態のなかで、民衆自身の狂気が、どういうふうに発生し、拡がっていくか、民衆の狂気自体、おそろしい一つの時代環境を形作っていく過程が、子供の眼を通して、無気味なほど冷静に描かれている。勿論、ナチス政権下のドイツの話ではあるが、そのまま移して以って、「大東亜戦争」下の日本のこと、と読むことができる。そして残念ながら、この種のすぐれた「戦争文学」を、日本の戦争文学に、まだ見い出すことはできない。

既に「戦争文学」と呼ばれるものに、私たちは、数多くのすぐれた作品をもっている。フィクションの世界だけではなく、ノン・フィクションのジャンルには、職業文筆家ではない人々の手になった夥しい数の手記・記録の類があり、とりわけて、『きけわだつみのこえ』に代表されるような、戦没者の遺稿集の存在を、忘れることはできないであろう。

だが、ほんの一つの例を、ドイツの少年向け作品に見たとおり、未だ描かれていない戦時下の体験、つまり埋もれたままになっている体験の掘り起しは、必ずしも、充分になされているとはいえぬ。(戦争中、日本人が日本人にたいして加害者であった、という事実は、私自身の記憶から抹殺することのできぬいまわしい記憶だが、この事実を仮借なく告発した「戦争文学」を、私は寡聞にしてか識らない。)

それのみか、既に書かれたさまざまの「戦争文学」作品の評価、位置づけ、いや、そもそもの腑分けすら、ほとんどその緒についていない、というのが実情であろう。

一方に、烈しい風化の時間の避けがたい進行がある。その風化と闘いながら、未掘の体験を掘り起し、記録し、既刊の戦争文学を正しく評価し、あるべき位置に位置づける作業を急がねばならぬ。意義があろうがあるまいが、十五年にわたって、三百数十万の同胞の生命を犠牲にした記録は、民族の歴史として、細大洩らさず記録され、伝承されねばならぬもの、と私は思う。

作者の戦争体験と文学

有山大五

一

たとえば史的展望にそって近代日本の文学消長の波幅を測定してみることを試みた場合、なにはさておいても浮上してくるのは、日清、日露、日中、太平洋の四戦争であろう。それに第一次世界大戦時を加えて考えてもよいのだが、つまり、わが国の近代において、文学の思潮が、質・量ともに変貌を遂げる時点に戦争が深く大きくかかわっている事実に気づかされるのである。

北村透谷の評論、樋口一葉の小説、島崎藤村の詩等を代表作品とする「文学界」は明治二十六年に創刊され、三十一年に終刊をみるまで五十八号を世に出して、まさしく前期浪漫主義運動の開花をもたらしたし、その「文学界」の主情性と唯美的傾向を継承していわゆる星菫派時代を現出した「明星」は、明治三十三年四月に創刊せられ、通巻百冊を数えて同四十一年に終る。「明星」と対立する自然主義文学の台頭もまた日露戦争を前後とする時期に重なり、同様に短詩型の分野での「馬酔木」が、伊藤左千夫を中心に創刊せられたのは同三十六年であり、以後約四年間に通巻三十二号を発刊して、のちの「アララギ」王国の礎石をきずいている。また、大正期の代表的文学運動となった

「白樺」の理想主義文学が全盛をきわめたのは、いうまでもなく第一次大戦の時期であったし、第二次大戦にあっては、その前にいわゆる文芸復興が、後には戦後文学の花が瞭乱と咲いたことは、いまだ記憶に新しい。

すなわち、文学もしくは文学運動の澎湃としておこっているのは、各時代ともに戦争の前後であったという現象に注意したいのである。そして、その現象が、たとえ戦争を否定嫌悪する立場のものであろうと、肯定讃美する立場にあるとせよ、あるいは戦争を無視するかたちのものであろうとも、創作と戦争とのかかわりが決して無縁でないことの、いや、大いに有縁であることの証明となり得るものと思われる。

日露戦争の行方がほぼ決定した時期、明治三十八年夏に、早くも「戦後文界の趨勢」を「新小説」誌上に発表した夏目漱石は、その中で、日本が、日露戦争において、ヨーロッパで第一流の「頑固で強い」ロシアを向こうにまわして「連戦連捷」したことは、文学にも多大の影響を及ぼすことを喝破している。「連戦連捷」という意味は、船を沈め敵を斃すという物質上のことであるが、この反響が「精神界へも非常な元気を与へるので」、それがあらゆる方面に波及していくのだというのである。大敵ロシアを相手に勝てるかどうかの不安の中で、それ故に大声をあげて苦しまぎれに叫んでいた「大和魂」が、「真実に自覚自信して出た大なる叫びと変化して来る」ので、同じ日本であっても、たとえ言うことばが同じであっても、「言ふ人の了簡が違つて来る。人間の気が大きくなつて、向ふも人なら此方も人だといふ気になる。ネルソンも偉いかも知れぬが我が東郷大将はそれ以上であるといふ自信が出る」からであるとしたうえで、次のように述べている。

かうなつて来ると、文学の方面にも無論この反響は来るのである。今までは西洋に及ばない、何でも西洋の真似をしなければならぬと、一も二もなく西洋を崇拝し、西洋に心酔して居たものが一朝翻然として自覚自信の途が展けて来ると、その考へも違つて来る。日本はどこまでも日本である。日本には日本の歴史がある。日本人には日本人の特性がある。あながちに西洋を模倣するといふのはいけぬ。西洋ばかりが手本ではない。吾々も手本

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com